

リレー談話室

Cross Fire Again !



三輪 博 (第 16 期)

MBI 第 19 期の友國洋さんからバトンを引き継ぎました。

友國さんには、1990 年から 1992 年にかけて『クロスロード』に掲載された「Cross Fire」に特に積極的に寄稿いただきました。ありがとうございました。友國さん以外で寄稿いただいた 3 期の坂上弘さん、4 期の川内清隆さん、7 期中村幸紀さん、11 期の神田忠夫さん、14 期の塩原政次さん、須藤健治さん、山田久文さんたちにも、今更かもしれませんがあらためて感謝申し上げます。

最近、企業の不祥事が目立ちますが、そのなかで自由な発言とか合理的な発想が過剰に制約を受けていて、企業の自浄力を弱めている可能性があるような気がします。MBI では、本当の議論ができる仲間がいて、幸せなことではないかと感じています。

「Cross Fire」は提示されるテーマについて、主張をぶつけ合い、広く考えたいというところから提案しました。つまり、仲良く激しく議論しましょうというのが主旨。

取り上げたテーマは、下記の通り。(掲載された号)

- 第 1 回 ヒラメワッペンについて(第 8～9 号) (注: 上しか見ない上司の机に貼るワッペン)
- 第 2 回 「さんづけ」の是非(第 9～10 号)
- 第 3 回 「外国人労働者受け入れ」の是非(第 11～12 号)
- 第 4 回 「定年延長」の是非(第 12～13 号)
- 第 5 回 「アメリカ人の労働倫理観批判」是非(第 13～14 号) (注: 日本高官による発言)

四半世紀前の議論は今でもテーマになりそうですが、次の四半世紀後にも同じテーマが議論されているのか興味をもつところ。

今回は、第 4 回で議論した定年について再度振り返ってみたいと思います。Cross Fire Again!

当時の定年延長についての是非論は下記の通り。

- ① 定年が延長されると、エネルギーが少なくなってから第2の人生をスタートすることとなり、有意義な人生を送るには遅すぎる。⇒反対
- ② 定年延長は社員を会社に縛り付けるものではなく、好きな仕事を優先すればいいことである。⇒賛成ではあるが、定年まで勤めるかどうかは個人の選択の問題である。
- ③ 定年は自分で決めるべきであるが、そのための蓄財・スキル取得が可能であるような企業環境が前提である。⇒賛成ではあるが、定年延長だけでは会社が決めた定年でとなり自分で決められるまでにはいかない。

当時と比較すると、人手不足による熟年労働者の活用など、全体状況は変わってきているような気がします。まだまだ高齢者にとって転職のハードルは高く、定年を自分で決めるまでには至っていないのが現実。しかし、例えば、若い方が主力の会社では経験のある高齢者のニーズがいろいろあるようで、いろいろあたっていけば出会いはあるような感じもします。

自身についていえば、これまで3回定年を迎えました。新卒で入社した会社で51歳、次の会社で58歳、直近の会社で68歳。最初の2回についてはすんなり就職先が決まりました。これに対し、直近の会社は6月に退職ということで12月頃から就活していましたが、探している状況が続いています。

そのとき目についたのが、森下仁丹の「第4新卒採用」。社会人としての経験を十分積んだ人材を、性別・年齢問わず採用しようとするもの。社長さんも50歳代で転職された方でしたが、幹部要員を大分探されたようです。しかし、適当な方が見つからなかったことから、このような採用方針を決め、発信されたようです。自身は結局応募しませんでした。上は70歳代の方からもあったとのこと。このような会社があることを知るだけでも、まだまだチャンスがあるかもしれないとの希望を感じた次第です。

定年後どうするかは、個人によってかなり状況が異なると思いますし、最終的に決めるのは本人ですが、その気があるのであれば働ける社会であって欲しいところであります。

次の最終号は、編集委員の土田晃道さん(18期)をお願いします。

<2017.7.2 記>

☆☆☆